

## 浅大腿静脈を用いた遠位膝窩動脈バイパスの1例

自治医科大学附属さいたま医療センター 心臓血管外科

野中 崇央 (のなか たかお ; 35 才)

松本春信、玉井宏一、橋本和憲、堀大治郎、木村直行、由利康一、山口敦司

症例は78歳女性。左下肢痛・第3趾潰瘍壊死のため前医を受診し、左浅大腿動脈閉塞に対してEVT（ステント留置）および左第3趾切断術を施行された。しかし、4ヶ月後に下肢痛の再燃および切断端治癒遷延を認めたため、CTを施行したところステントは閉塞しており、血行再建目的に当院紹介となった。両下肢静脈瘤術後で使用可能な伏在静脈が欠如しており、足部切断端からの感染の上行も危惧されたため、浅大腿静脈によるバイパスを行うこととした。左浅大腿動脈内ステント抜去・内膜摘除後に左浅大腿-遠位膝窩動脈バイパス術を施行した。下腿病変も残存していたため、創傷治癒が得られなければ二期的追加バイパスも検討していたが、術後5か月で切断端の治癒が得られた。